

中間的複合動詞「きる」の意味用法の記述 ——本動詞「切る」と前項動詞「切る」、後項動詞「一切る」と関連づけて——

李 暎 洙*

キーワード: 切断, 完遂, 極限, 統語的複合動詞, 中間的複合動詞

要 旨

本稿は、本動詞「切る」、前項動詞「切る」、後項動詞「一切る」の意味用法と本動詞と複合動詞の関連性を調べたものである。複合動詞の後項動詞の意味分析の手順として、後項動詞の「一切る」の形態を除去し、除去したものが非文になるか否かということに基づにした。非文になったときには語彙的に構成された語彙的複合動詞に近く、非文にならなかったときには統語的に構成された統語的複合動詞に近いとみなした。このことから複合動詞「一切る」には統語的複合動詞と語彙的複合動詞がともに含まれているので中間的複合動詞であることが分かった。また、本動詞「切る」と前項動詞「切る」は「物の切断」「発言」「対処」「中止」というところで関連性をみせている。さらに、本動詞「切る」と複合動詞の後項動詞「一切る」は「物の切断」「完遂」「極限」「自信満々」というところで結びつけられる。これらのことから前項動詞「切る」と後項動詞「一切る」は、本動詞の意味と全く異なる抽象の意味から派生したのではなく、程度の差はあるものの本動詞「切る」の意味と密接な関係があることが分かった。

1. はじめに

日本語の複合動詞¹を前項動詞の連用形と後項動詞との組み合わせと捉えた場合、本動詞としてはもちろん前項動詞としても、後項動詞としても使われるものに「切る」がある。とくに複合動詞の後項動詞として使われるときの「切る」は単独で使われている場合に比べて意味が抽象化されている場合が多い²といわれている。しかし、従来の研究では具体的にどういう意味がどのように抽象化されているのか、複合動詞と本動詞とにどういう関連性があるのかという点を考慮に入れ、論じた研究はあまりない。そこで、本稿では本動詞と複合動詞の抽象の度合いがきわめ

* LEE Kyung Soo (イ キョンズ): 漢陽大学日語日文学科講師(韓国)。

¹ 本動詞「切る」、前項動詞「切る」、後項動詞「一切る」、前項動詞と後項動詞を合わせていうとき複合動詞「切る」と表記する。

² 斎藤倫明(1992: 180)を参照されたい。

て高いと思われる「切る」を中心に本動詞「切る」と、前項動詞「切る」、後項動詞「-切る」との関連性を調べてみる。

(1) 肉屋さんは肉を包丁で切る。

(2) 立ち木を切り倒す。

(3) 舌を噛みきる。

(1) は包丁で肉を切るという「切断」の意味であり、(2) は立っている木を切って倒すという「切断」の意味であり、(3) は舌を噛んで切るという「切断」の意味である。ここでいう「切る」「切り倒る」「噛み切る」の「切る」はつながっているものを刃物などで分けはなすという「切断」の意味である。しかし、次の例では「切る」を「切断」の意味からは把握しにくく、本動詞としての単独用法の意味よりも抽象化され、異なる意味で使われている。

(4) 結婚の話を切り出す。

(5) 時代が変わったから頭を切り替える。

(6) 精神的にも肉体的にも疲れ切った。

(7) 彼は階段を下りきって、消え去った。

(8) 夜が明け切った。

(9) 彼はいつも堂々とそう言い切ってくれた。

(10) 張り切って試合に臨む。

(11) 決まり切った挨拶をする。

(12) 思い切って口から出してみた。

(4) の「切り出す」の「切る」は「用件や相談などを話す」という意味であり、(5) の「切り替える」の「切る」は「これまでの方法、考え方、規則などをやめる」という意味で、「切断」の意味だけでは捉えにくい。さらに、(6) の「疲れ切る」の「切る」は「非常に」という意味であり、(7) の「下り切る」の「切る」は「最後まで」という意味で、(8) の「明け切る」の「切る」は「完全に」という「完遂」に近い意味が含まれている。また、(9) の「言い切る」の「切る」は「堂々に」という「自信満々」に近い意味である。また、(10) の「張り切る」、(11) の「決まり切る」、(12) の「思い切る」の複合動詞の後項動詞の「-切る」は一固まりの語彙化された複合動詞³であるので「切断」の意味とは関連が非常にうすい。

そこで、前項動詞の「切る」の意味と後項動詞「-切る」の意味は「切断」の意味以外にもいくつかの意味が含まれていることが予想される。よって、本動詞の「切る」の意味用法をより具体的に考察することにより、本動詞の「切る」と複合動詞の前項動詞「切る」と後項動詞「-切る」との関連性を調べ、複合動詞「切る」の文法的特徴を考察するのが本稿の目的である。ここ

³ 語彙的複合動詞と統語的複合動詞に関しては Kageyama (1984: 16-30), 森山卓郎 (1988: 45-55), 塚本秀樹 (1993: 225-246), 李 (1994: 223-232) を参照されたい。

での本動詞「切る」と前項動詞の「切る」の意味用法は『類語例解辞典』、『日本語基本動詞用法辞典』、『日本語用例辞典』、『学研国語大辞典』の辞書を参考にして論議の出発点とする。しかし複合動詞の後項動詞「-切る」の意味用法の記述は実際、使われている場面が多く、抽象化の度合いが高いので、文や談話と関連させる。さらに文全体にどれほど寄与しているかを判断するため後項動詞「-切る」を除去して意味用法を調べる。資料の対象は文学作品・論説文・シナリオなど幅広く設定した。調査対象は30編で、この調査対象から後項動詞「-切る」を含む複合動詞を用いた文をすべて抜き出した。その結果、延べ語数(206)、異なり語数(84)、の資料を得た。この採集の結果に基づいて意味用法を分析していった。

2. 先行研究の検討

これまで「切る+後項動詞」に関する研究はほとんどないが、複合動詞「前項動詞+切る」の研究は多い。「前項動詞+切る」の研究は大きく二つの流れに大別することができる。一つは体系的な研究ともいえるべき流れで、複合動詞アスペクトの枠組みの中で捉えようとする動きである。代表的なものに金田一⁴(1978: 17-18, 29-58)・寺村⁵(1984: 164-183)が挙げられる。金田一では、「-きる」が「-てしまう、-おわる、-おえる」と同様に動作・作用の完了を表わす終結態(アスペクト)として扱われている。とくに「-きる」を接続する動詞のアスペクト上の性質によって次の二つに大別している。①「瞬間動詞+きる」は「全部、終わりまで」の意味を表わし、②「継続動詞+きる」は「十二分に」の意味を表わす。また、寺村はシンタクスの観点からアスペクト的な複合動詞を時間的相と空間的相とに分類・分析している。金田一とは異なり、「-きる」を「-はじめる、-つづける、-おわる」と別に扱っている。「-おわる」などは時間的相を表わすものに分類し、「-きる」は空間的相を表わすものとして捉えている。

一方、このような体系的な研究の流れとは異なる、局所的研究というべき流れがある。この流れの特徴はアスペクトという枠組みを越えたところで、「-きる」の意味用法についての考察を行うところにある。姫野⁶(1980: 23-46)では多岐にわたる意味用法について詳しく述べ、主体が有情物であるか無情物であるかに分け分析を行っている。さらに類義語の「-ぬく、-とおす」との比較研究も行い、一見類似しているように思えるこれらの意味には相違があるということを主張している。また、森田(1977: 184-188)では、先行する動詞の表わす意味に応じて「-きる」の意味が次のようないくつかの段階に分けられている：① 終了意識の段階による類別(姫野の完遂に近い)、② 自信を持って行う行為、③ 限界意識の頂点(姫野の極度に近い)。

⁴ 金田一(1976: 29-58)の、「動作相のアスペクト」の部分を参照されたい。

⁵ 寺村(1984: 74-183)の、「三次的アスペクト」部分を参照されたい。

⁶ 姫野(1980: 23-45)では、「-きる」は単に極度に達した状態を表わすのに対して、「-ぬく」や「-とおす」はある一定の期間続く状態を表わすとしている。

このように姫野にはない自信を持って行う行為という類別を立てていることが特徴的である。この局所的研究によって、「-きる」の意味がある程度明らかにされている。以上の体系的研究と局所的研究とが持つ問題点は、他の形態と「-きる」との関係と、「-きる」の持つ意味とが整合性を持っていないことであると包括することができる。一方、このような流れの中で、森山⁷ (1988: 45-55) は体系的研究の立場をとりながら局所的な現象に目を配った分析を行っている。そこではさまざまなテストを用いることにより、「-きる」が意味的には「-はじめる」「-つづける」「-おわる」と同じようにアスペクト的な性質を持っているが、動詞との結合の在り方は、「-はじめる、-つづける、-おわる」のようなものと異なると述べている。このテストの方法はより客観的な基準で分類しているといえる。また、「-きる」と「-おわる」の意味的な内容の違いにも言及し、「あそびおわた」とはいえるのに、「?あそびきった」とはいえないなどの理由から、「-きる」には語彙的に内容的完遂ともいうべき特殊な意味があること、「-きる」は「つかいきる」にみられるような何らかの程度性を有していることから「-おわる」とは異なる特殊な場面に使われることを指摘している。また、森山 (1988: 51) は Kageyama (1984: 16-30) の統語的複合動詞と語彙的複合動詞の区別をベースにし、「-きる」が「?焼かれきる」のように受身形は成立しにくいとし、中間的という項目を立て、統語的複合動詞の「-終わる」と異なる範疇で取り扱っている。筆者も基本的には森山と同じように「-切る」類と「-終わる」類を別々に扱うのに賛同し、「-切る」類は統語語彙両形可能な複合動詞であり、「-終わる」類は統語的複合動詞であるので両者を区別すべきであると思う。しかし森山と影山の複合動詞の内部結合の在り方についての議論で問題なのは「-切る」ばかりでなく、「-終わる」「-終える」などの「完遂」を表わす複合動詞も前項動詞と後項動詞の間に「受身」の挿入が実際不可能であるため、「-切る」のように統語語彙両形可能な複合動詞の「受身」の挿入の可能・不可能だけで統語的か語彙的かを判断することは無理があることである。そこで本稿では「-切る」が語彙的に構成されているのか統語的に構成されているのかを、「切る」が意味的に分解が可能かどうかという観点から考察していきたい。分解可能であれば、統語的に構成された複合動詞であり、分解不可能であれば、語彙的に構成された複合動詞であるといえる。複合動詞の分解可能・不可能と分ける前に本動詞「切る」と前項動詞「切る」の意味用法を調べる。

3. 本動詞「切る」の意味用法

ものの「切断」といわれている「切る」には「切断」の意味用法以外にはどのようなものがあるかを調べてみる。

⁷ 複合動詞が統語的か語彙的かというテストの基準については森山 (1988: 45-55) を参照されたい。

表 1 本動詞「切る」の意味用法

【物の切断】	(13)	紙を切る
【中止】	(14)	縁を切る
【発言】	(15)	口を切る
【対処】	(16)	風を切って走る
【交ぜ合わせ】	(17)	カルタをよく切って配る
【除去】	(18)	傘の水を切ってください
【極限】	(19)	期限を切って借金する
【完遂】	(20)	百メートル走で10秒を切る
【方向転換】	(21)	左へハンドルを切る
【自信満々】	(22)	見栄を切る

(13)は「切断」の意味の「紙を切る」の「切る」は刃物などで物を断ち切るという基本的意味で、これ(ここではコアの意味ではなく、プロトタイプの意味に近い。詳しくは吉村(1995)を参照されたい)はさまざまな名詞を伴って用いることができる。(14)は関係などのつながりを中止するという「中止」の意味に近く、(15)は発言をし始めるという「発言」の意味に近いのである。(16)は勢いよく進んでいくという「対処」の意味に近く、(17)はカルタ、トランプなどで、札をそろえてよくまぜるという「交ぜ合わせ」の意味で、(18)はふったり、したたせたりして、水分を無くすという「除去」の意味で、(19)は時刻や期限などを定め、そこまで限るという「極限」の意味で、(20)は十秒以内に走るという意味で、目漂点(完遂点)を中心に下回るという意味で、「完遂」の意味に近いのである。(21)は方向を変えるようにするという「方向転換」の意味である。(22)ははっきりしたことをするという「自信満々」に近い意味である。これらは「切る」の対象物は(13)の「紙」、(17)の「カルタ」、(18)の「水」のように具体的なもの、(14)の「関係」、(15)の「話」、(16)の「風」、(19)の「時限」、(20)の「十秒」、(21)の「左」、(22)は「見栄」のように抽象的なものがある。ここで「切る」の意義素自体に変化はみられない(しかし、「を」格の前の名詞によって、意味が具体化し、限定されるので、名詞と共に起る「切る」はさまざまな意味用法を持つ。以下、意味用法と表わす)。

4. 前項動詞「切る」+後項動詞の意味用法

前項動詞「切る」+後項動詞の場合、「切り捨てる」は「切って捨てる」、「切りはなす」は「つながっているものや一つになっている物を切って別々にする」という意味で「切断」の意味である。しかし「切る+後項動詞」において前項動詞「切る」には切断の意味しかないのだろうか、またもしあるとしたらどういう意味があるのかを調べてみたい。

表 2 前項動詞の意味用法

【物の切断】	(23)	夕刊から漫画の部分を切り抜いた
【発言】	(24)	用件を切り出した
【中止】	(25)	配給の方法を切り替える
【対処】	(26)	彼女は一人であの喫茶店を切り回している

(23)の「切り抜く」の「切る」は本動詞の「切断」の意味と同じように手・はさみ・ナイフ・のこぎりなどを使って必要な部分だけを切つてとるという「切断」の意味である。(24)の「切り出す」の「切る」は大事な話・相談・用件などを思い切つて話題として持ち出すという「発言」の意味である。(25)の「切り替える」の「切る」はこれまで続いていた方法、考え方、規則などをすてて(中止して)、新しいものや別のものに替えるという「中止」の意味であり、(26)の「切り回す」は「切り盛りする」と同じ意味で、「切る」はめんどうなことなどを中心になってうまく処理したり、仕事を次々と巧みにこなす「対処」の意味である。このように(23)の「切る」の対象が具体的なもので、(24)(25)(26)は「切る」の対象が抽象的なものである。よって対象物が具体的か抽象的かによって前項動詞「切る」の意味用法が異なる。

5. 前項動詞+後項動詞「-切る」の意味用法

5-1. 「前項動詞+きる」の意味分析の基準

前項動詞+後項動詞「-切る」の分析に当たって、まず調査対象についての規定を行う。まず採集した資料にはいくつかの性質の異なる「-きる」複合動詞が含まれている。これは寺村(1969: 32-48)などによって指摘された、前項動詞と後項動詞のどちらに重心があるかという問題と関連することである。寺村は複合動詞をその前項成分と後項成分との比重によって四つのタイプの類型として捉え、その中で「(本)動詞+アスペクトの補助動詞」として捉えられるもののみを考察の対象としている。この複合動詞の特徴は前項動詞と後項動詞との独立性が高いことである。本研究でも独立性が高いか低いかを区別する根拠として、二つの動詞を意味的に分解可能か否かを中心に調べる。

この分解可能であるか否かの判断の基準であるが、本研究では「前項動詞+きる」という複合動詞を含む文から「きる」という形態のみを除去し、除去したものが非文になるか否かということを基準にする。ここで除去の手続きを踏むのは、「-切る」で構成されている複合動詞が統語的か、語彙的かの判断をする一つの手がかりを示し、「切る」が複合動詞の全体にどれほど寄与しているかを判断するためである。例えば、次の文はもともと「きる」という語を含んだ文であるが、「きる」を取り除いたときの(27') (28') (29') (30')の状態は異なっている。例えば、

(27) 疲れ切って、とほとほと家へ向かって歩いている。(熱)

- (27') 疲れて, とぼとぼ家へ向かって歩いている。
 (28) 彼を社会的強者と信じ切っていた。(金)
 (28') 彼を社会的強者と信じていた。
 (29) 俺の顔を見るやいなや思い切って, 飛び込んでしまった。(坊)
 (29') ?俺の顔を見るやいなや思って, 飛び込んでしまった。
 (30) 母親の熱心な後押しが押し切ったのである。(潮)
 (30') ?母親の熱心な後押しが押したのである。

上の例文(27')(28')では「-きる」を除いて文を作成しても文全体としては非文にならないし、しかも意味のずれもあまりみられない。しかし、例文(29')(30')の場合は意味不明な文になる。この基準で分解できたものを分解可能グループ、できないものを分解不可能グループとする。前者には「(本)動詞+アスペクトの補助動詞」のものしか含まれていないはずである。しかし後者には、姫野(1980: 23-45)のいう「接頭語+きる」を含む、それ以外のさまざまなものが含まれている可能性が高く、両者は別々に検討される必要がある。以下に、前項動詞の分解可能・不可能についての分類を示す。延べ語数は206件、異なり語数は84件であった(()内の数字は資料の件数)。

分解可能なもの(延べ語数 119 件, 異なり語数 72 件)

言う(9) 疲れる(8) 閉める(7) 演じる(3) 降りる(3) 数える(3) 上る(3) 断つ(3) 待つ(3) なる(3) 上がる(3) 分かる(2) 諦める(2) 明ける(2) 死ぬ(2) 信じる(2) 捨てる(2) 耐える(2) 待つ(2) 走る(2) たてる(2) 澄む(1) 生きる(1) 痛む(1) 描く(1) 衰える(1) 押さえる(1) おびえる(1) 貸す(1) 借りる(1) 乾く(1) 決まる(1) 困る(1) 窮れる(1) 断わる(1) 支える(1) ささげる(1) 醒める(1) 絞める(1) 知れる(1) 染まる(1) 出す(1) 償う(1) 使う(1) 付き合う(1) 徹する(1) とがる(1) とらえる(1) なれる(1) 逃げる(1) のびる(1) 弾く(1) 払う(1) 引く(1) 冷える(1) 任せる(1) 弱る(1) 忘れる(1) 閉める(1) 渡る(1) 腐る(1) 説明する(3) 安心する(2) 我慢する(1) 辛抱する(1) 尊敬する(1) 退屈する(1) 墜落する(1) 通過する(1) 抵抗する(1) 同情する(1) 冷却する(1)

分解不可能なもの(延べ語数 87 件, 異なり語数 12 件)

思う(38) 打つ(10)(ぶちきる 1, ぶっきる 1, うちきる 8) やる(8) 押す(7) 割る(6) 突く(5)(つききる 2, つっきる(3)) 張る(5) 煮える(4) 踏む(3) 振る(2) 乗る(2) 寄る(1)

5-2. 二つの動詞に分解可能な場合の意味

5-2-1. 切断を表わす後項動詞「-切る」

- (31) 前歯で噛みきる。
 (32) はさみで挟みきる。

(31)と(32)のように後項動詞「-切る」が「切断」の意味で使われているものは実例では現われなかったが、手や歯や刃物などで物を断ち切るという意味を持ち、物理的変化が実際に起こる

場合である。このように(31)と(32)は後項動詞が「切断」の意味をそのまま保っている場合である。この場合、前項動詞は「切断」の方法を表わすことになる。

5-2-2. 完遂を表わす後項動詞「-きる」の意味

本節では、上記の分解可能グループ(統語的複合動詞)を取り上げて意味分析を行う。「-きる」を付加した動詞句と付加しない動詞句とを比較したときに、付加しないものには感じられず、付加したものに感じられる意味が「-きる」によって付加された意味である。以下で「-きる」によって付加された意味をいくつか観察する。なお付加された意味は、ある事象が終わり(完成)⁸の段階にあることを示すことである。ところで、このグループには動詞の違いによって、姫野(1980: 23-45)のいう極度と完遂の意味を取る複合動詞がいくつか含まれている。ここでの完遂は体系的な研究の中でのアスペクト的なものとして捉えることができる。まず「動き」の展開過程が完遂の終わりの段階を表わすと考えられるものから分析する。

(33) そこを上りきって広場へ出ると、到るところに兵隊たちがたむろしていた。(敦)

(34) (下りきったとき)さあ、みなさんにさよならを言いなさい。(ぼ)

(35) 24キロ余りを走り切った選手が優勝するという単純なものではない。(天)

(36) 全力を出し切ったのだから、清々しい気持ちだ。(天)

例文(33)(34)(35)(36)の「上がる」「下りる」「走る」「出す」のようにほとんどが人の意志的行為を表わす前項動詞が多い。これらには「最後まで」という意味が付加されていると考えられるが、例えば、(33)(34)の場合は能力や諸事情で「最後の段階にまで上がった、下りた」という動きの展開過程が最後の段階で、また(35)(36)も「最後まで走った、全力を出したのが最後の段階にあることを示す」という行動がある到達点が決められている状況下において努力して最後まで行ったという「完遂」の意味である。ただし完了⁹を表わす「-しおわる」の「走ることを完了した」、「全力を出すことを終わった」という意味とは違うニュアンスを持っている。また例文(33)や(34)に関しても、「上がり道の一番上の頂」や「石段の一番下」を動作の行われる到達点として考えれば人の動作がそこに到ることを意味していると考えられる。

5-2-3. 極限を表わす後項動詞「-きる」の意味

極限の状態(これ以上「前項動詞」+「こと」ができないほど「前項動詞」である)を表わすと考えられるものの分析を行う。この意味も「完遂」の意味と同じように「-きる」の意味が希薄に

⁸ ここでの「完遂」は城田(1985: 40-52)の命名(完成)を応用した(動きの完成・完了のようなニュアンスを伝える)。

⁹ 複合動詞の後項動詞の意味記述を行う際に「完了」という語を用いない。

なり前項動詞を強調する働きをするものである¹⁰。

(37) これでも俺は一家の主人だ。この没落した家を立て直さなくちゃなんの。 (ば)

(38) そうして支那間のお椅子に、疲れ切ったようにして腰かけていらした。 (斜)

(39) 退屈しきっている自分をどうすることもできなかった。 (敦)

(40) 相手は弱りきっていて返事もしない。 (黒)

例文(37)(38)(39)(40)の前項動詞「没落する」「疲れる」「退屈する」「弱る」に関しては、「極限まで、最大限に」という意味が付加されていると考えられるが、これらも可能な限りという言葉で置き換えが可能であろう。つまり「没落する」「疲れる」「退屈する」「弱る」ことに何らかの限界を設定し、それらがその限界に達しているという段階的变化を表わすことを意味していると考えられる。これらの「-切る」の含まれている(37)は「完全に没落する」、(38)は「非常に疲れる」、(39)は「非常に退屈する」、(40)は「非常に弱る」のように極限に達した状態を表わし、前項動詞の共通的な性質は無意志的な動詞といえるものが大部分である。以上の分析から「-きる」によって付加される意味は、動作、行為あるいは変化に限界や到達点が存在して、それが達成される、あるいはそれを行為の主体が達成する。完遂や極限の状態という類別は、前項動詞の性質によって達成される点が到達点が限界かというものと共起副詞との区別によるものであると思われる。さらに副詞との共起とも区別されるのである。完遂を表わす「-切る」は「終わりまで」「最後まで」「すべて」という終結性の副詞と共起しやすいが、極限の状態を表わす「-切る」には「ひどく」「非常に」「十分に」という状態を表わす副詞と共起しやすいということが分かる。

5-2-4. 自信満々を表わす後項動詞「-きる」類の意味

前節ではいくつかの前項動詞と「-きる」との組合せを通して、「-きる」の中心的意味、すなわち、動作・行為が限界や到達点に達すること、を観察した。しかし、限界らしいものを動詞句の中で見つけることが困難な組合せも存在する。例えば、「言い切る」「演じ切る」「諦め切る」「断り切る」がそうである。これはどのように説明すればよいであろうか。これらは自信満々を表わす後項動詞「きる」においても前節と同様に、「-きる」を付加しない文と付加したものとの意味の差を求めると次のようになる。

(41) 王妃の役をみごとに演じきった彼女は、一転、悲劇の役を背負われた。 (天)

(42) いつも堂々とそういいきってくれた彼。 (道)

(43) 山田夫人の依頼をきっぱりと断りきった。 (天)

例文(41)(42)(43)のこの「-きる」が完遂と極限の状態の意味をもっていないことは明らかであるが、前節でみた基本的な意味とは明らかに異なる性質を持っていることが付加されているの

¹⁰ 姫野 (1980: 23-45) では、「-きる」はその行為の単なる終了を表わすのではなく、行為者の予定通り、完全に行われることを表わしていると述べている。

が分かる。このため、このように自信満々を表わす項目は前節で立てた中心的な意味では説明しきれない。よって、このような「きっぱりと、堂々と、簡単に」という意味を付加する「-きる」は先にみた中心的な意味とは別の意味を立てるべきであると思われる。ところで森田(1977: 184-188)はこの「言い切る」を「自信を持って行う行為」であるとして「思い切って行う」「犯人逮捕に踏み切る」と同種のものとして扱っている¹¹が、本研究ではこの二つの複合動詞「思い切る」「踏み切る」は前項動詞の意味が複合動詞の意味に寄与する度合いが低いいため、分解不可能グループと類別し、本節では扱わない。したがって本研究では「きっぱりと、堂々と、簡単に」の意味の「自信満々」を表わすものに該当するものは「いいきる」「演じ切る」「締め切る」「断り切る」である。

5-3. 二つの動詞に分解不可能な場合の意味

上述の三節が分解可能グループ(統語的複合動詞)の分析であった。ここでは分解不可能グループ(語彙的複合動詞)の分析を行う。分解不可能グループには「突っ切る、振り切る、割り切る、打ち切る、押し切る」などという、「接頭語+きる」の意味を持つ群と、「煮えきる」のように元来アスペクト的な用法に由来を持つものが含まれている。また「踏み切る」「思い切る」「やりきる」のようにどちらか判断がつかねるものもある。このように二つの動詞に分解不可能なもの(一固まりの語彙的複合動詞)にはほとんどがアスペクトの意味が入っていない(即ちある局面の段階の事象を表わしがたい)といえるだろう。

(44) その準備に張り切っていた。(坊社)

(45) 次々と、突っ切って、垣根からもぐって出たり入ったりしながら進んでいく。(窓)

(46) 母親が困惑したが、一糸も乱れない見事な率直さでその場を押し切った。(潮)

(47) 危機をみごとに乗り切った執念はすごい。(天)

(48) 校長ってものが、これならば、何の事はない、煮えきらない愚図の異名だ。(坊)

上記の例文からそれぞれ「切る」という後項動詞を除くと(44)「?準備に張っていた」、(45)「?次々とつって、垣根から」、(46)「?その場を押した」、(47)の「?危機を乗る」のように意味不明の文になってしまう。さらに副詞との共起の面を考えてみても一言でいえないほどさまざま(とうとう、みごとに、強引に、きちんと)でばらつきがみえる。このようにさまざまな副詞と共起していることは「-切る」の影響ということよりは二つの動詞が組み合わせられて一つの語彙的動詞に固まったからではないかと思われる。また(48)のように「煮えきらない」という形でしか用いられないものもある。これらには人物の態度や行動を描写する表現(思いきりが悪くて、ぐずぐずしている彼)として用いられている。すなわち、前項動詞「煮える」が仮に比喩的に人物の

¹¹ 森田(1977: 108)ではそれ以上付け加える必要がない、これで完全だ、その行為に自信を持って行うのだ、という意味として捉えられている。

態度や行動を描写する意味を持っていたとしても、「煮えない愚図」とはいえないことから、これらは一語化されたもの(形容詞的用法)として別扱いにした方がよいと思われる。次は「踏み切る」と「思い切る」のような例文をあげてさらに検討してみる。

- (49) 彼は甲板を踏み切って飛び込んだ。(潮)
 (50) いっそう思い切って本職の不良になってしまったらどうだろう。(斜)
 (51) 時々、思い切ったあくびをした。(心)
 (52) 二人の着物をどんどん売って、思いきりむだ使いして、贅沢な暮らしをしましょうよ。(斜)

(49)の「ふみきる」は、元来は「甲板をふみきりにして飛び込んだ」というような意味で使用されていたものが、複合動詞全体が比喩的に用いられるようになったものと考えられる。また例文(50)(51)(52)の「思い切って」「思い切った」「思い切り」も同様の過程を経て現在にいたることが予想される。とくに(50)の「思い切って(ためらわず大胆に)」は連用修飾形のように使われている用法が38件の中で12件で、(51)の「思い切った(ためらわず大胆に行う)」は連体修飾形のように使われている用法が38件の中で20件で、(52)のように「思いきり(思う存分、徹底的に)」という副詞的用法は38件の中6件であった。このように「思い切って」「思い切った」「思い切り」はそれぞれ「思い切る(きっぱりと諦める)」の複合動詞と異なる意味用法を持つ一固まりの語彙化されたものであるといえる。以上挙げたような二つの動詞に分解不可能な複合動詞は、少なくとも現代語の用法では「(本)動詞+補助動詞」としては解釈しがたく、このような非アスペクト的な意味、即ち語彙的に一語化された語彙的複合動詞は前節の統語的複合動詞と別に扱う必要がある。

5-4. 後項動詞「-切る」の意味用法

以上のことから「前項動詞+切る」を意味的に二つの動詞に分解することが可能であるか、不可能であるかによって次の表3のようにまとめることができる。(53)の「切る」は、本動詞の基本的意味「切断」と同じように唇を歯で噛んで切ったという意味で、(54)の「-切る」は2万メートルを最後まで走ったという「完遂」の意味である。また、(55)の「-切る」は強行軍で非常に疲れたという「極限」の状態を表わす。(56)の「きっぱりと言いつ切った」は自信満々にいったという「自信満々」の意味で、(57)の「克服する」のように一固まりの語彙化されたものもある。これらを表にすれば次のようになる。

表3 後項動詞「-切る」の意味用法

【物の切断】	(53) 唇を噛みきって病院に入院した
【完遂】	(54) 二万メートルを走りきった
【極限】	(55) 強行軍で疲れ切った

- 【自信満々】 (56) その件についてきっぱりと言いきった
 【語彙化】 (57) 危機を乗り切った

6. 本動詞「切る」と複合動詞「切る」の関連性

6-1. 本動詞「切る」と前項動詞「切る」の関連性

本動詞「切る」と前項動詞「切る」の関連性を次のように示すことができる。

表 4 本動詞「切る」と前項動詞「切る」との関連性

【物の切断】	(58) (本動詞の「切る」) 枝を切る
	(59) (前項動詞の「切る」) 枝を切り落とす
【発言】	(60) (本動詞の「切る」) 口を切る
	(61) (前項動詞の「切る」) 結婚の話を切り出した。
【対処】	(62) (本動詞の「切る」) 水を切って泳ぐ
	(63) (前項動詞の「切る」) 彼女は一人であの喫茶店を切り回している。
【中止】	(64) (本動詞の「切る」) 縁を切る
	(65) (前項動詞の「切る」) 配給の方法を切り替える

上の表4から分かるように、本動詞「切る」と前項動詞「切る」は結びつけることができる。(58)の「枝を切る」と(59)の「枝を切りはなす」は、ものの「切断」として結びつけることが可能である。また、(60)の「口を切る」と(61)の「結婚の話を切り出す」は話題として持ち出すという「発言」し始めるの意味でつながりを探することができる。(62)の「水を切って泳ぐ」と(63)の「一人で喫茶店を切り回す」はうまく処理していくという「対処」の意味である。(64)の「縁を切る」は縁を中止することで、(65)の「配給の方法を切り替える」は配給の方法を中止し、新しいものにするという「中止」のことから関連づけられる。

6-2. 本動詞「切る」と後項動詞「-切る」の関連性

本動詞「切る」と後項動詞「-切る」の関連性を次のように示すことができる。

表 5 本動詞「切る」と後項動詞「-切る」の関連性

【物の切断】	(66) (本動詞の「切る」) 木を切る
	(67) (後項動詞の「-切る」) 舌を噛みきって死んだ
【完遂】	(68) (本動詞の「切る」) 百メートル競走で十分を切る
	(69) (後項動詞の「-切る」) 百メートルを泳ぎ切った
【極限】	(70) (本動詞の「切る」) 期限を切って借金する
	(71) (後項動詞の「-切る」) 彼は弱り切っている
【自信満々】	(72) (本動詞の「切る」) 見栄を切る
	(73) (後項動詞の「-切る」) 彼はそのことに關していつも簡単に言い切った

表5から分かるように本動詞「切る」と後項動詞「-切る」とを関連づけることができる。ものの「切断」と思われる(66)の本動詞「切る」と(67)の後項動詞「-切る」とを結びつけることができる。また、(68)は「完遂」の意味に近い本動詞「(十分を)切る」の「切る」は、到達点を基準の時間を下回るようにするという意味で、(69)の「百メートルを泳ぎ切った」の後項動詞「-切る」の到達点(基準)を完遂するということと関連づけられる。また、(70)の「期限を切る」の本動詞「切る」と(71)の「彼は弱り切っている」という「後項動詞」「-切る」は極限の期限を越えると極限の状態に達するという「極限」で結びつけることができる。また、(72)の「見栄を切る」の本動詞「切る」と(73)の「簡単に言い切った」という後項動詞「-切る」は「自信満々」に何かを行うということで結びつけることができる。

7. おわりに

以上、本動詞「切る」、前項動詞「切る」、後項動詞「-切る」の意味用法を調べた。複合動詞の後項動詞の意味分析を行う手順として「後項動詞」の「-きる」という形態のみを除去し、除去したものが非文になるか否かというのを基準にした。すなわち、分解可能なのか、分解不可能なのかを判別したのである。前者に基づいての分析は統語的複合動詞(完遂と極限と自信満々)があることが分かった。しかし後者の分解不可能なグループには語彙的複合動詞のみ存在していた。言い換えれば、「前項動詞+きる」でも分解可能・不可能かによって統語的複合動詞か語彙的複合動詞かの判断の基準を示した。その結果、後項動詞「-きる」には統語的複合動詞と語彙的複合動詞が共に含まれている中間的複合動詞であることが分かった。また、本動詞「切る」、前項動詞「切る」、後項動詞「-切る」の関連性を結びつけることができた。本動詞「切る」と前項動詞「切る」は「物の切断」「発言」「対処」「中止」で関連性をみせている。また、本動詞「切る」と後項動詞「-切る」は「物の切断」「完遂」「極限」「自信満々」で関連性をみることができた。以上の意味の関連性から分かるように前項動詞「切る」でも後項動詞「-切る」でも本動詞の意味と全く異なる抽象的意味ではなく、程度の差はあるものの本動詞「切る」との関連性の深いことが分かった。

参 考 文 献

- 石井正彦(他)(1987)『複合動詞の資料集』, 国立国語研究所。
 李 暎 洙(1994)「日・韓両語における複合動詞の対照研究——対応関係を中心に」, 『教育学部紀要』42-2, 広島大学教育学部, pp. 223-232。
 ———(1995)「日・韓両言語における複合動詞格の対照考察」, 『NIDABA』24, 西日本言語学会, pp. 123-132。

- 李 暉 洙 (1996) 「日・韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다/nay-ta/」の対照研究——本動詞との関連を中心に」、『日本語教育』89号、日本語教育学会、pp. 76-87.
- (1997a) 「現代朝鮮語の複合動詞について——動詞の語尾{아}+「내다」を中心に」、『朝鮮学報』162号、朝鮮学会、pp. 61-97.
- (1997b) 『日・韓両語の複合動詞に関する対照研究——文法的複合動詞を中心に』未公開博士学位論文、広島大学大学院.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』、ひつじ書房.
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房.
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成試験的研究』、ひつじ書房.
- 城田 俊 (1985) 「国語動詞の動作相」『国語国文』54-7、京都大学国語国文学、pp. 40-52.
- 塚本秀樹 (1993) 「複合動詞と格支配——日本語と朝鮮語の対照研究」、『日本語の格をめぐる』、くろしお出版、pp. 225-246.
- 寺村秀夫 (1969) 「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト(その1)」、『日本語と日本文化』I、大阪外国語大学、pp. 32-48.
- (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』、くろしお出版.
- 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」、『日本語の語彙と表現』、大修館書店、pp. 63-104.
- 森山卓郎 (1983) 「動詞のアスペクチュアルな素性について」、『待兼山論叢』17号、大阪大学、pp. 1-22.
- (1988) 『日本語動詞述語文の研究』、明治書院.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語』、角川書店、pp. 184-188.
- 姫野昌子 (1980) 「複合動詞「-きる」と「-ぬく、-とおす」」、『日本語学校論集』7号、東京外国語大学日本語学校、pp. 23-45.
- 山本清隆 (1983) 「複合語の構造とシンタクス」、『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』5、三重大学、pp. 316-380.

Miller, G. D. 1993. *Complex verb formation*. John Benjamins Publishing.

Kageyama, Taro. 1984. *Three types of word formation*. *Nebulae* 10. Osaka Gaidai Linguistic Circle: 16-30.

Hasegawa, Nobuko. 1993. *Japanese syntax in comparative grammar*. Tokyo: Kurosio.

参 考 辞 典

遠藤織枝(他) (1993) 『類語例解辞典』、小学館.

金田一春彦 (1980) 『学研国語大辞典』第二版、学習研究社.

小泉 保(他) (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』、大修館書店.

文化庁 (1990) 『日本語用例辞典』三版、大蔵省印刷局.

用 例 出 典

伊→伊豆の踊り子、金→金閣寺、黒→黒い雨、心→心、潮→潮騒、斜→斜陽、白→白蟻の巣、ス→スプーン一杯の幸せ(愛)、飛→飛ぶ夢をしばらく見ない、点→点と線、敦→敦煌、熱→熱帯樹、廃→廃園、ふ→ふぞろいの林檎たち、ば→ばらと海賊、坊→坊ちゃん、坊社→坊ちゃん社員、窓→窓ぎわのトットちゃん、道→道ありき(青春組)、雪→雪国、我→我輩は漱石である、友→友情、甘→甘えの構造、天→天声人語(人物組)、羅→羅生門、深→深い川、w→Wの悲劇、続→続氷点、兎→兎の目、小→小さな王国.

【記】 この論文は筆者が広島大学大学院に提出(1997. 3)した学位論文(未公開)の8章の一部に加筆訂正したものである.